

第6回（2009年11月11日）。「グローバリゼーションと児童労働」課題

Edmonds, Eric V., Nina Pavcnik, Petia Topalova (2009)

“Child labor and schooling in a globalizing world: some evidence from urban India”.

*Journal of the European Economic Association*, 7(2-3):498-507.

有本 寛

2009年10月14日

## 1. 報告者への課題

- （必須）Abstract, Introduction, Conclusion を読み、背景、課題と方法、結果を解説すること。
- （発展）2.2, 3（導入部と 3.2）を読み、仮説検証の方法について（1）式の解説を、結果について Table 2 を解説すること。

## 2. 背景

- 背景は、Introduction に簡潔に書かれている。
- インドの貿易自由化についてより深くは 2.1 に書かれているので、適宜参照すること。
  - インドの貿易自由化の特徴が3つ指摘されているので、これを押さえるとよい（p.500 の2段落目）。特に、3つ目の特徴が重要。

## 3. 課題と方法

- 課題は、Introduction に明瞭に書かれている。
- 仮説を理解するうえでは、まず全体の枠組みを把握するとよい。インドでは 1991 年に貿易が自由化され、関税が引き下げられ、輸入からの国内産業の保護がなくなった。このことは児童労働を増やすだろうか、減らすだろうか？それはなぜか？
- 仮説検証上のポイントは、都市によって貿易自由化の効果の大きさ（都市全体としてみた場合の関税引き下げ幅）にバラツキがあるということ。なぜなら、都市ごとに産業構成（貿易財と非貿易財の構成）が異なるため、貿易自由化に晒される度合いも異なるからである（例えば、ある都市には非貿易財を生産する産業しかなければ、貿易自由化の影響はない）。
- 2.2 を読んでどのようなデータを使っているかを確認すること。分析の単位は何か（地域、家計、児童？）
- （1）式の変数の定義を確認すること（（1）式のすぐ下に書かれている）。被説明変数の説明は 2.2 を参照。
- 仮説との関係で言うと（1）式は、何で何を説明しようとしているのか？
- （1）式を推定結果のうち、どの係数に注目すればよいか？（p.502 の第2段落目参照）
  - ヒント：貿易自由化によって、Tariff は上がるのか、下がるのか？
- 結果を解釈するうえで、貿易自由化の結果 Tariff が下がった産業でどのような影響（調整）があるかを理解するとよい（p.500 の第3段落目参照）

#### 4. 結果

- 分析の結果得られた統計的事実は、貿易自由化によって関税保護率の低下が大きい都市ほど、児童労働の減少や就学の向上の程度は小さい、ということ。
- これはどのように解釈できるだろうか？

#### 5. その他

- 結論に納得したか？
- 貿易自由化が児童労働を増やすかどうかを検証するためには、他にどのような方法が考えられるか？
- 貿易自由化 → 輸出産業が活性化 → 家計所得 up → 児童労働 down, 就学率 up という説もある。本稿の分析の枠組みでこれを確かめるためにはどうすればよいか？

#### 6. 用語

- Attenuate 弱まる, 薄まる
- heterogeneity ばらつき, 異質性
- returns to education: 教育の収益率
- time-varying, region specific: 時間を通じて変動する, 地域固有の。要するに地域×年ごとの Tariff.
- principal activity: 主な活動。インドの National Sample Survey (NSS) では、各人の時間配分について Principal activity と subsidiary activity を聞いている。